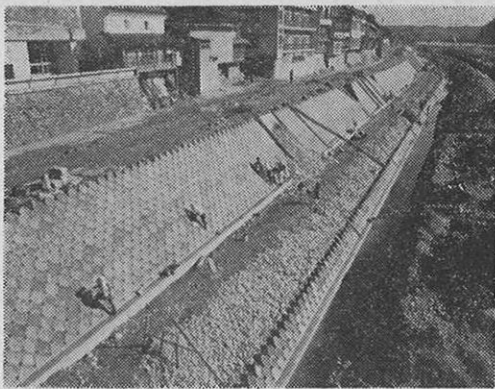


改修すすむ球磨川（人吉市）



又上流は昭和三八年以来三カ年連続した人吉市、川辺川流域の大災害を防ぐためその河川改修が実施されている。

白川改修事業

昭和二八年六月の大水害後、熊本市黒髪町から下流一六詰区間について改修事業が進められている。本県の社会、経済の中心地である熊本市を貫流しているためその促進が望まれている。

菊池川改修事業

玉名平野、菊鹿平野の九〇〇畝に及ぶ沃野を例年の洪水から防護するため主要区間について築堤がなされており、土地利用の増大を期している。

都市周辺河川の改修事業

熊本市周辺は坪井川、井芹川及び加勢

川、天明新川等例年水害は慣習化され、地域開発を著しく阻害しているため、その防除対策とし河道の整備を進捗している。

水の高度利用へ

経済の高度成長により土地利用の増大と共に国民生活および諸産業の河川に対する関係も大いに变化しており、治水事業のあり方も複雑になってきている。即ち築堤することにより、氾濫していた洪水は河道の中に閉じ込められることとなり、山地に降った雨は洪水時に一時に流出してしまうのが大部分であって、常時の水量は洪水量に比し、非常に少なく、水の利用は限定されている。

一方産業の発展は工場の建設、人口の都市集中化をもたらし、各種用水の需用の増大となり、又いろいろの公害により維持用水の確保が要求されつつある。

これ等の要請には当然河川水の確保、貯留が必要となり、今まで直接海に流している洪水時の水量を貯え、洪水時の水量の低下策と合わせて水利用面への転換を図ることが緊急の課題となりつつある。即ち多目的ダムの建設が逐次計画され、実施に移されている。

本県では、球磨川における市房ダムがあり、昭和四〇年七月出水時には、洪水調節にも大いに活用され、又その農業用水は、球磨川地方の農産物生産の根幹となっており、発電でも農産業に寄与する

ところ大なるものがある。

尚現在実施中のものに緑川ダム、計画のものに球磨川の洪水防除のきめ手と言われる川辺川ダム、又八代平野を守る氷川ダムがあり、地域開発の原動力としての機能が期待されている。

又菊池川については、水需要の増大とともに上流地域にダム築造が期待されている。

港 湾

八代港改修と工業地帯

八代地区における臨海工業地帯の条件

本県は、有明海、不知火海、天草灘に接し、海岸線の延長は八二〇海里に及び、海上交通は本県産業にとって重要な役割を果している。

この海域の自然条件の特徴は、潮汐の干満差が大きく、加えて球磨川、緑川、白川、菊池川など多くの河川が流入し、土砂を流出するので、各地に干潟地が発達し、天草島を除く、海岸地先は干潮時において一〜二詰の沖合まで干潟となることである。

これは港湾にとって不利な条件となっているが、反面、臨海工業地帯の造成およびこれにともなう大規模港湾の建設には有利な条件となり、将来の大規模な臨海工業地帯として、開発の可能性をもっている。

いずれにしても、地域開発は治水事業の進捗にまつところだけであり、水需要の増加と相互に関連して進展するものであり、本県は幸い水資源の面では豊富であるので、水源としての特徴を生かして、産業の基盤としての土地及びエネルギーの確保のための河川事業に期待されるものがある。

八代地区は、球磨川河口のデルタ地帯であるため、遠浅で良質な埋立土砂が豊富であり、造成価格も安く広大な工業用地造成には最適な地である。工業用地に隣接する港湾施設整備の可能性については不知火海が天草島に囲まれて波浪も小さく、航路も一部約一、三〇〇畝をしゅんせつすることにより一万五、〇〇〇畝の資物船の航行が可能となり、水深一〇〇程度までのしゅんせつはポンプ式しゅんせつにより安い単価で施行できる。又大型船の繋留施設については地盤を改良することにより施行しているが、小型船は方塊積等の安易な工法で施行可能である。

工業用水については、球磨川の表流水

を取り入れることにより、農業用水を除き一日四四万六、〇〇〇トが工業用として利用できる。

更に労働力については豊富に供給できること等市場に遠いという欠点はあるが臨海工業地帯としての条件を具備している。

八代港の沿革

八代港は球磨川の河口港として歴史は古く、八代の発展に大きな役割を果たしてきた。

明治に入り、現在の蛇籠港が修築され、水深一・五尺、物揚場八六畝が完成するに及んで、当地の農林産物の輸送、離島交通の基地として小型船による沿岸輸送が活潑となり、これらを背景として明治二二年、日本セメント工場が蛇籠港の隣接地区に近代工場建設の口火を切り、水深二尺の専用物揚場を築造して原材料および製品の輸送を開始してより海上輸送も一段と活潑になった。その後、鹿兒島本線の開通とともに十条製紙、日産化学、興国人絹バルブ、三葉酒造等の大工場が相次いで立地し、本県工業の中心として、又、南九州随一の工業都市として発展するに至り、本港の重要性は飛躍的に増大し、大正一一年には内務省の指定港湾となった。しかしながら蛇籠港は、大量の資物輸送には応じ得ないため、地元県市においては、近代的港湾施設の建設を緊急課題として昭和一四

年八代港修築計画並びに臨海工業地帯造成計画の立案を港湾協会に委嘱した。

これに基づき画期的な商港及び工業港の整備計画が策定され、第一期計画として総額二二八万円の事業として予算化されたが、軍の要請により計画変更を余儀なくされ、昭和一六年より埋立地の造成に着手したが、昭和一八年戦争の激化により挫折した。

戦後本県においては昭和二三年より二次にわたる産業振興計画に着手し、産業構造の高度化を目指す長期計画を実施したが、その重要な鍵として球磨川の電源開発等立地条件の整備による八代臨海工業地帯の造成計画が取り上げられ、商業港としての整備の一環として昭和二三年、再び修築計画が策定され、第一期五カ年計画として、総工費二億六、〇〇〇万円をもって、水深三尺物揚場四百畝及び水深五尺、岩壁一〇〇畝を中心とする内港の整備に着手した。その後、昭和二八年には計画の一部を修正、五カ年計画として整備を行ない、昭和三一年には取扱量も五一万トと増加するに至った。

しかも地区内工場は飛躍的な生産拡充を行ない、内港区の埠頭施設の増強のみでは処理し得ず、外貿対象埠頭施設の整備が強く要請されたので、県は昭和三十六年、県民所得増大のための具計画を策定し、産業基盤としての港湾の重点的開発に着手し、昭和三六年度を初年度とする港湾整備五カ年計画、並びにこれに引続

く昭和四〇年度から昭和四四年度までの新港湾整備五カ年計画を樹立し、外港においては一万五、〇〇〇ト岸壁二、一

ス一万ト岸壁一、一〇〇ト岸壁二、二〇〇ト岸壁三、二〇〇ト岸壁四、これにともなう泊地航路のしゅんせつ、内港については現在の導流提を移設すると同時に二、〇〇〇ト岸壁三、二〇〇ト岸壁四を新たに修築すべく現在鋭意施行中である。

又これ等のしゅんせつ土砂を利用して昭和四〇年に農林省の八代干拓地二五五万平方尺を買収し、これを工業用地に転用するため、第一段階として約七五万平方尺の完成を目標に工事中である。この間取扱貨物量も昭和三四年八七万ト、昭和三六年一五六万ト、昭和三八年一四四万ト、昭和四〇年一九一萬トと急増し、同港の貿易港指定が各方面から要望され昭和四一年四月には貿易港の指定をうけた。

八代港の開港は本県では、三角、水俣につぐもので、これによって、従来三角港等の貿易港を経由していた外航船は直接八代港に入港できるようになり、時間や経費の無駄がはぶけ、地元企業をはじめ関係者

によるこぼれ、今後八代港の飛躍的な発展が期待されるようになった。

八代港の現況と将来

(一) 内港

内港整備事業は昭和二三年度より着手し、昭和三二年には水深一三尺、物揚場三〇〇畝貯油施設一万六、五〇〇平方尺上屋一棟（五六七平方尺）の諸施設が整備されたが、貨物量の取扱いは逐年増加の傾向にあるので、昭和三六年度より物揚場の延長工事を始め、昭和三八年度に至り新に物揚場三〇〇畝が完工し、旧物揚場を併せ六〇〇畝となった。又これと併行して荷捌地九、九〇〇畝が増設されたので増加する貨物の処理が可能となった。

又これに関連して臨港道路四、〇〇〇畝の舗装を行ない、浮橋橋二基を増設し

